

恵みと真理のニュース



2015 年 8 月の一次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



[証]

自分の喜びと満足ではなくただ主の喜びと栄光のため

献身する人生で変えてくださったこと感謝します

“母が苦しんで生まれたが私を救ってくださって尊いしてくださった神様、一生神様を支え御言葉に従順して生きる。”これは私が好きでよく歌うヤベツの祈りの賛美歌詞です。

わたしは12年前、高校の頃神様を信じ支える信仰生活を初めました。不信者だった母はキリスト教に変えて母も教会に通うようになりました。以前の母は教会に通う人を断って家には入れられないようにして伝導するため恵みと真理ニュースを渡しても強く断るほど仏教の信者でした。そんな母は神様の御言葉の恵みと聖霊の感動によってイエス様を受けいる驚くべき事が起こりました。神様の奇跡でした。その後、熱心に教会に通いいつも幸せな母について私も高等部で礼拝を始めました。しかし、その時でも、私はイエス様に対する信仰ではなく新しく出来た友達が好きで熱心に教会に行き自分の意志ではなく友達について礼拝に参加しました。そうするうちにスワン聖殿で青年部礼拝と集いに参席してから信仰も出来てイエス様も受け入れ真の信仰生活が始まりました。

神様はそこで真実な姉妹兄弟を予備して下さり、彼らと共に交わり主を支える信仰生活を習うようにしてくださいました。そして、日々信仰が成長して青年部の活動も参与するようになりました。また、教会の

幼稚部の子供達を支えるまで成長しました。それだけでなく神様の摂理で毎週キリスト教礼拝がある学校に入り礼拝と奉仕する喜びも感じました。平日には学校で賛美団をして主日は教会で余地部を支え様々な職分を担えるため体は疲れても心は喜びました。

2年が過ぎて奉仕することが多くなり重たい荷物になりました。ある日、私の信仰状態を点検するようになりました。当会長牧師がその日“全てのことを神様の栄光のため、主の喜びのためキリストが尊いになるように行うことで説教してくださいました。その御言葉に私を照らしてみるといつからか分からないが、自分の喜びと、自分の満足のため奉仕していました。実際に神様と霊的に離れていたのです。私が誰よりも神様の所に近くいると考えましたが、神様の栄光ではなく今までの活動は人々が好きで行なって人々のため行った事です。御言葉と恵みを愛しイエス様の前に膝をまわすイエス様から褒め言葉を聞いたマリアでなく仕事で忙しくてむしろ叱られた姉マルダのような姿でした。

わたしは静かに自分を振り返ってみてイエス様に対する初めの愛で戻すため礼拝に集中して、毎日神様の御言葉を読んで黙想し、ビジョンのため祈りして聖霊の働きの中で親密な関係を持ちました。そうしながら信仰生活においても優先順位を確実に悟り主の愛を再び感じる事ができました。その過程を通して確実な悟ったことはまず、私が主の恵みを受けて主と暖かい

愛の手を感じるとはじめの真の神様の道具でつかわれることでした。その時からどんな事をやる前まず神様に祈りをしてから聖書を読んで御言葉を黙想する癖が出来ました。“これが自分の満足のためなのか、主の喜びのためなのか？これか神様の御心なのか？今はドントン聖殿で幼稚部の教師として奉仕しています。以前と比べると多くのところで奉仕していませんが、今この瞬間が感謝で幸せです。主が私に教会学校で子供達を教えさせられる理由があることを知っています。言葉と形式で行なうことではなく真実な告白で行なう献身をするように訓練を受け、神霊な知識をもって愛で支えるためだと信じます。神様にどう使われるか分からないですが神様は私をととても愛して道を導いてくださり永遠な命と天国を予備してくださったことは明確に知っています。

教会学校で信仰深い素晴らしい先生達を知らせてくださり、尊い魂が救われ共に賛美する恵みを与えてくださった神様に感謝します。私の弱い姿まで愛し世の様々な問題で倒れる時、限りない慰めと励ましてくださって必要なことを知り与えて下さる神様を賛美します。私の領土を広げ主の権能で助けてくださる主を完全に信頼して愛します。ハレルヤ！



[信仰コラム]

キリストの苦難とキリスト人の苦難

“……キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている…”(ローマの信徒への手紙 8:16-18)

できれば苦難を経験しないようにするのが至情です。しかし、実は苦難がすべて無益で有害なわけではありません。有益がなる場合もあります。私たちが苦難を全面的に嫌悪するのではなく、苦難を免れるか、最小化できる方途を探す一方、苦難を有益なるようにする道を模索しなければなりません。聖書は苦難を理解して対処していくにあたって、豊かな知識と知恵を提供しています。すべての人生が経験するようになる一般的な苦難がなく、特別な苦難について説明します。

第一に、キリストの苦難について説明します。

イエス・キリストがこの世に来た目的は苦難を受けて死んでためです。その理由は私たちが苦難がなく、永遠に喜びと安息だけのお手元に引き渡すためです。実に奇妙で驚くべき話です。イエスが受けた苦難は罪人のための贖罪の苦難です。イエスは予告された通りにエルサレムで逮捕され、大祭司の庭とローマ総督の管井から苦難を受けました。ピラトは、イエス様を審問した後、軍兵らにむち打って十字架に釘を刺しました。イエスは頭に可視の冠を使ってつばを吐くことといやがらせを受けて、十字架を背負って、まさにゴルゴタの丘に上がりました。軍兵たちはイ

エスの服を脱がした上に十字架に釘を刺しました。イエスは彼のように言い表し難しかった羞恥と苦痛の残酷な刑罰を受けました。苦難に出たキリストを伝えられない教会は教会がありません。イエス・キリストが受けた苦難の真実の意味を知って苦難に出たイエス・キリストを信じる者は罪を赦免されて義人となり、永生を得て、神様の子供になります。そして将来の苦難の影すらくなく、喜びと安息ばかりの天国で暮らすようになります。

第二に、キリスト人の苦難について説明します。

キリスト人が栄光に思っ受けなければならない苦難があります。第一に、イエス・キリストを信じているために翻弄される苦難です。世間はなぜ、キリスト人を憎むのでしょうか。所属が完全に異なるため、逼迫し、イエス・キリストをこの世に送った神様を知らないのに逼迫します。このような苦難は神様がくれた恩恵です。したがって、むしろ喜ぶべきです。イエス・キリストを信じているため、苦難を受ける人は恵まれた人です。空の賞が大きく、栄光の霊すぐに神様の霊と一緒にしています。第二に、福音を伝えるために翻弄される苦難があります。イエス・キリストを信じて救援得た者がなれば、キリスト教は唯一無二の救いの宗教であるため、救援の福音を伝えざるを得ません。また、福音証拠は、キリスト人に与えられた神様の至上命令だから、また、キリストの愛が強く勧誘して福音伝道の霊異な聖霊が熱心をくれないために福音を伝えざるを得ません。福音を伝えるなら、逼迫を受ける覚悟をしなければならず、殉教する

覚悟もしなければなりません。このような苦難は恥ずかしいことはありません。キリストと共に受ける苦難であり、キリストと共に光栄を享受する福を得るようになります。

第三に、主のしことに力を入れる為の苦難があります。キリスト人があれば、日常生活が変化し、礼拝と注意に献身する生活がその中心になります。このように熱心を出して注意の仕事に取り組むようになれば、過度に信じるという非難を受けて、社会生活で冷遇ももらいます。しかし、主のしことに力を入れるのは決して無駄じゃないです。第四に、キリストの中で敬虔に生きようとするために翻弄される苦難があります。イエス・キリストを信じれば、世俗的なことに興味が消え始めて、以前、楽しんだものを捨てることになります。信仰生活に妨害になる趣味と娯楽を遠ざけることになります。このように世界の人たちと付き合い合わないため、逼迫を受けて困難を受ける場合が生じます。このような苦難は、キリストのための苦難であり、キリストと共に受ける苦難です。

キリストの苦難とキリスト人の苦難について聖書通りに理解して信じ、これを自分に適用する人は実に恵まれた人です。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム『緑の牧場、清い川』本の語り中」

愛ない場合と愛がある場合の結果



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

コリント人への第一の手紙で 13 章はいちめん愛に対するメッセージで一杯です。信仰の徳目の中に愛の優越性と大切さそして愛の性格を詩的な文体で記録していて愛の詩編だと呼ばれてよく愛の章と呼ばれます。コリント人への第一の手紙で 12 章は賜物に関して記録されているのに 12 章 31 節 終りに “あなたがたは、更に大なる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう。” と言った後 13 章に愛に関して記録しました。そして 14 章の開始は “愛に従って求めなさい” と言った後賜物を求めて適用する方法を記録しています。だから神霊な賜物を求める動機も愛ではなければならないし、賜物の使用も愛にしなければならないことをおっしゃっています。私たちが本文の言葉の意味を正しく理解しようとすれば先に愛の正義を下げた後に本文の内容をよく見なければなりません。愛の正義を確かにしなければ世の中でよく聞くようになる博愛主義の精神の強調しかないがなってしまいます。真正な愛と言うのはイエスキリストの十字架を通じて体験されて理解されなければなりません。真正な愛と言うのはイエスキリストにあって神様の愛を体験するので湧き出る神様に向けた感謝の表現であり、神様を敬い畏れる態度です。このような愛が生動機になる時すべての行為は隣りにも、自分にも価値のあることになってこのよう愛が私たちの生を満たす時私たちの品性を聖なる偉大にさせてくれるのです。

先に、愛がない場合に招来される結果をよく見ます。

“たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。” (コリント人への第一の手紙 13:1~3)。

第一部分には愛がなければ “私が何もありません” しました。今日の交通手段の発達によって世界はまさに地球村になってお互いに隣り町内のように行き来しています。こういうので多くの国の言語を駆使するのが非常に必要で重要になりました。このために多くの国の言語を駆使するだけでなく甚だしくは天使の話まですると言えはすごい人物で人々が相対するでしょう。ですが人の方言と天使の話と言っても愛がなければ生命がない非人格的な楽器と違いないと言いました。その次は “預言する力があってすべての秘密とすべての知識が分かってまた山を移すに値する信仰のあっても愛がなければ何もありません” と言いました。旧約聖書に登場する預言者エリサは預言する力があってすべての秘密が分かりました。今日もエリサ預言者のような能力を持った者がいたら手厚い待遇を受けるようになるでしょう。そのうえに山を移すに値する信仰まで所有していたらもっと有名な人になるでしょう。しかし愛がなければ何でもありません。

二番目部分には愛がなければ “私にどんな利益がない” と言いました。

利己的な公明心で行ったことはたとえ他人には利益を与えても自分にはどんな有益がないという意味ではないです。神様に対する愛と隣りの魂に対する愛なしも救済と慈善に力をつくして犠牲的な生を暮らす方々がたくさんいます。このような人々の同胞愛や人間愛は美しいのです。しかし永遠な意味はないです。何の事を行おうが真正な愛がなければ “私が何でもありません。” という事実と “私にどんな有益がない。” この事実を私たちは分かなければなりません。神様の愛に感服されて神様を敬い畏れから出た真実の愛で行うことだけが自分の生涯を有益されさせて永遠な価値を持たせてくれます。

次は、愛がある場合に招来される結果をよく見ます。

“愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。” (コリント人への第一の手紙 13:4~7)。ここに十五種項目が記録されています。愛が持つて来る結果です。聖書でおっしゃる愛はずなわ神様です。神様は愛であると言いました。神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神様の愛がこんなに現われたところになったから私たちが救いしようとイエスキリストをくださったと言いました。そうするので “愛” とすれば神様が浮び上がらなければならないイエスキリストが思い出さなければなりません。 “愛” すればイエスキリストにあって注いだところになったその驚くべきな神様の愛を思わなければなりません。

第一、愛があれば長く堪えます。愛は寛容であり性急に行動しないで怒るのを遅くする人になります。

第二、愛があれば情深い。荒しくなくて柔和くて親切な人になります。 “柔和” とすればモーセが浮び上がるつもりです。 “モーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた。” (民 12:3) しました。イスラエル民が彼に非難を浴びせて恨みを数えきれなくしました。 “どうして私たちがエジプトから連れて出たか? 荒野で死なせようと思ったことなのか?” こんなに食って掛かってもむしろモーセは神様に祈りながら民の当面した問題解決のために労力しました。

第三、愛があればねたむことをしないです。他人がよくできて成功することを見る時にねたみやきもち焼かないです。カインはアベルをねたみとやきもち焼きました。それぞれお供えを差し上げたが神様がカインとそのお供えは受け入れなかったアベルとそのお供えは受け入れました。カインはその理由が何なのかをよく見て自分の過ちを直すべきでした。しかしカインはそうしなくて弟のお供えに火が臨んで神様が嬉しく受けることを見て嫉妬心が燃えました。その炎が恐ろしく弟を野で呼び出して石で打ち殺す殺人者になりました。

第四、愛があれば誇らないです。大ことを成就してからもいつも自分の不足を感じる人になります。

五番目、愛があれば高ぶるではないです。驕慢と言うのは身にあふれる考えと行為です。天使場ルシファーが身にあふれる考えをした結果サタンで転落するようになりました。天使の中に一番すぐれて、卓越な知恵と美しさを持ったルシファーが自分の地位で離れ去って、

家所を棄て、自分の本分を去って驕慢になることで結局は空中で追い出されて今空中で果てしなく譏訴する事をして妨げる事をしている最後の時この地で、地上に追い出されてからその次の無底坑に閉じこめられてからその次にわずかに硫黄に入って行くことになってしまいます。黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大なる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。(イザヤ書 14:12~15、ユダの手紙 1:6) 驕慢のため身にあふれるように行動したのです。

六番目、愛があれば不作法に行いしません。他人の立場を考慮しないで自分勝手に行動するのが無礼です。愛は礼儀正しい人になります。

七番目、愛があれば自分の利益のみを求めないです。自分の権利より自分の義務をもっと思う人になります。

八番目、愛があればいらだたないです。自分の心を治める能力があります。

九番目、愛があれば恨みをいだかないないです。愛があればくやくしくて残念な事と恨みなどを長期間心に留めないです。

十番目、愛があれば不義を喜ばないです。他人の不幸を喜ばないという意味もあります。

十一番目、愛があれば真理とともに喜びます。真理の言葉を慕って真理に付いて真理の言葉に止まって暮すのを喜ぶ人になります。私の一身上にいくら有益があるのかを尋ねないでそれが真理か、それが神様の言葉にかなう道なのかを尋ねてその道に行きます。たとえその道に行ってから狭い道に入って行くようになっても喜びながら行きます。

十二番目、愛があればすべてのものを堪えます。

十三番目、愛があればすべてのものを信じます。神様の能力と愛ですべてのものが善を成すこと信じます。

十四番目、愛があればすべてのものを望みます。肯定的で前向きの変化があることを期待するようになります。

十五番目、愛があればすべてのものを耐えます。耐えるという単語は積極的な意味があります。消極的な諦めの中に耐えるのではなく不屈の精神を持って耐えるという意味です。

すべての人にいなければならないことはイエスキリストにあって神様の愛です。聖徒の皆さんはイエスキリストにある神様の豊富な愛、差別ない愛、変わらない愛、切ることができない愛、永遠な愛を深く体験してください。そしてその愛によってすべての事を行うので意味ある結果が従うように願います。